

「仏陀の教え（仏教）」の簡潔な説明

(1) **縁起の法** …これが仏陀のいう「永遠の真理」で、のちの仏教教義の根本・基調

(縁起…“縁りて起こる” 法…“真理”・“教え” “法則”の意)

すべての存在は因(主たる原因・直接原因)と縁(条件・副次的原因・間接的原因)によって生起(生まれて存在)し(これを**因縁生起**、略して縁起という)、独立したもの(それ自身で存在するもの)はなく(これを**無我**という)、また、恒常的なものではなく、すべては生滅(生まれては滅ぶ)・変化する(これを**無常**という)、いいかえれば、すべてのものは相互に関係(依存)しあってのみ存在できている。つまり、**すべてのものは互いに支え合っている**。この真理を端的に表現すると、「相互依存・無常・無我」とすることができる。

(2) **五蘊観**…(1)に基づき、(1)を補強する自我論

人間の心身は、色(物質)・受(感覚)・想(表象)・行(意志)・識(判断)という5つの蘊(要素)からなるが、それらは相互に関係しながら変化するものであるがゆえに、それらの集まりである人間もまた変化するものであり、従来、人間の本体として追求されてきたアートマンというものは実在しないのである。従って、死によって五蘊が分解・分散すれば次の生の起こる余地はない。<このように仏陀は、生きとし生けるものは生まれ変わるという輪廻の考えは唱えなかったが、のちの仏教徒が生きとし生けるものへの慈悲の心を養うためにこの考えを唱えるようになった。しかし、やがて仏教は、輪廻の考えを、人は悟りを得て解脱しない限り生死を繰り返して苦悩を受け続けるという輪廻転生という「脅し」の考えとしてしまった。が、いうまでもなく、このような「脅し」は仏陀の教えに反する。>

(3) **四諦**…初転法輪(輪が転がるごとく広まるようにと仏陀が説いた最初の法/この場合の法は“人間の生き方の教え”

の意)において、(1)が理解可能なように実践的なものとして説いたもの(諦とは“人生の真理を諦かゝにする”の意)。

これは、仏教徒の認識・修養の基準となった。

① **苦諦**…「人生は苦なり、それには四苦(※1)・八苦(※2)がある」という法(教え=真理)

(※1) 生(時々刻々の経験に振り回されること)・老・病・死

(※2) 四苦に加えて、愛別離苦(愛しい人と別れ離れる苦しみ)・怨憎会苦(怨み憎む者と出会う苦しみ)・求

不得苦(求める物が得られない苦しみ)・五蘊盛苦(五蘊からなる心身より生じる苦しみ)

② **集諦**…「苦の集(集とは“集まり起こる”という意で、**発生原因**のことは、渴愛(※1)・煩惱(※2)・無明(※3)である」という法

(※1) (縁起の法をわきまえず)喉の渴いた者が水を激しく求めるように、度を外して(=渴)求める(=愛)

こと(執着すること)

(※2) (※1)によって生じるもの。三毒(貪^{どん}・貪^{むさぼ}り, 瞋^{じん}・恨み・怒り・憎しみ, 癡^ち・愚か)が最大のもの

(※3) (縁起の法に対する無知から)我執(おのれのことだけや自分の所有物や永遠の存在にこだわること)

の状態にあること

③滅諦^{めつたい}…「苦の発生原因を知り, それを断ち切ることによって苦は消滅^{ねはん}して涅槃(苦悩を超克した精神の平和)がおとずれる」という法

④道諦^{どうたい}…「涅槃、つまり苦の消滅に至る道は、<正しい道(人のあり方)の実践=精神的修養>をすることである」という法

(4)八正道^{はっしょうどう}…(3)－④を具体的に明らかにしたもの(精神的修養のやり方)

①涅槃に至る正しい道とは、正見^{しょうけん}(正しく見る)・正思^{しょうし}(正しく考える)・正語^{しょうご}(正しく語る)<以上は、理性の修養>, 正業^{しょうぎょう}(正しく行う)・正命^{しょうみょう}(正しく生活する)・正精進^{しょうしやうじん}(正しく努力する)<以上は、意志の修養>, 正念^{しょうねん}(正しい意識を持つ)・正定^{しょうじやう}(正しく精神集中する)<以上は、情緒の修養>の8つである

②正しく(正しい)とは中道(過度の快樂・禁欲のどちらにも陥^{おちい}らない)であるということであり、また、「自己と他者の救いに沿う」ということであり、それらは、自己に執着しないがゆえに自由で、慈(楽しみを与える)悲(苦しみを取る)に満ちた心とその実践よってのみ得られるのであるから、八正道とは、我執を捨て去ることで「他者あつての自分」=「縁起の法」を体認することである。

(5)まとめ 仏陀の教え(仏教)を一言でいうと、

①「精神的修養(八正道)による永遠の真理(縁起の法)の自覚による苦悩の超克(解脱)」

②または、「慈(楽しみを与える)悲(苦しみを取る)に満ちた心とその実践による縁起の法(すべてのものは互いに支え合っている)の自覚による苦悩の超克(解脱)」

(*)四法印^{しほういん}…仏陀の入寂^{にゅうじやく}(釈尊の死)後、仏陀の教えを正確に伝えるための法印(真理の印)とされた4つのもの(次の文中の4つの「 」)

この世のすべては苦である(「一切皆苦^{いっさいみいく}」), なぜか、この世のすべては因と縁によって生起する(因縁生起)がゆえに、すべて(=諸)の形あるもの(=行)はつねに変化しとどまることがなく(「諸行無常」), また、すべての法(この場合の法は“存在するもの”の意)には永続すべき実体性(我=アートマン)はない(「諸法無我」)からである。以上の事を認識(自覚)することで、苦悩の原因となる我執や煩惱^{ぼんのう}が消え去った状態(涅槃)がおとずれ、苦悩を超克した静かな境地(寂静^{じやくじやう})が得られる(「涅槃寂静」)

(以上)